

平成 25 年度（後期）海外渡航旅費助成金成果報告書

京都大学大学院 理学研究科
修士課程 2 年 谷 枝里子

日本地震学会より平成 25 年度（後期）海外渡航旅費助成を頂き、2013 年 12 月 9 日から 2013 年 12 月 13 日までサンフランシスコの Moscone Center で開催される AGU FALLMEETING に参加し、学会発表を行ってききましたので、その成果を報告致します。

私の学会発表は学会初日であり、“Subsurface fault geometry inferred from topographic relief and footwall geologic information: An example from the Acoma fault zone, southwest Japan”というタイトルで、“Seismology, Active Tectonics and Geomorphology in South and East Asia III: Japan Posters”セッションで発表をさせて頂きました。本研究は、地震危険度評価に不可欠な逆断層の地下形状やすべりを地形・地質情報から推定するというものです。生駒という特定地域を対象として研究を行っていますが、モデルの構築プロセスは類似の造構環境でも適応可能です。そのため、手法を中心に説明しようと心がけて発表に臨みました。

発表では、使用するデータが地形情報なのか地質情報なのかによって、断層の推定結果が大きく異なるという結論を中心に、興味を持って頂いたように思います。そのこともあり、やはり手法を中心とした質問を多く頂きました。使用しているデータ、計算モデルの背景、モデルパラメータの設定、断層運動以外の寄与等の質問を頂きました。質問をして下さると共に、私が今後の課題としていたパラメータの改善に役立つ貴重なご意見を数多く頂きました。英語という壁はありましたが、皆様の理解をしようとして下さる姿勢に助けられ、回数を重ねるごとに、自信をもって発表することができました。また、国内の学会ではお会いできなかった日本の先生方にもお会いすることができ、生駒という地域の特徴も含め、貴重なご意見を頂きました。

モデルの構築プロセスは分野や対象が違っていても、共通する考え方が多く、様々な発表が行われていました。今後の研究に活かせるように、「何を求めるために何の仮定が必要なのか、またそれは妥当なのかどうか」を意識しました。その視点で多くの発表に出会ったことから、自分のモデルをよりよいものにし、よりわかりやすく説明しようという思いが強くなりました。

日本にいたるだけでは巡り会えない方々とお会いし、数多くのご意見を頂きました。印象的であったことは、国際学会という英語の環境下で周りの方々が気さくに話しかけて下さったことです。聞きにきて下さった皆様や発表者の方々と、もっともっとコミュニケーションを取りたいと感じるようになりました。このような機会を与えて下さった日本地震学会の皆様、関係者の方々に深く感謝申し上げます。